



在りし日の  
石原 廣一郎

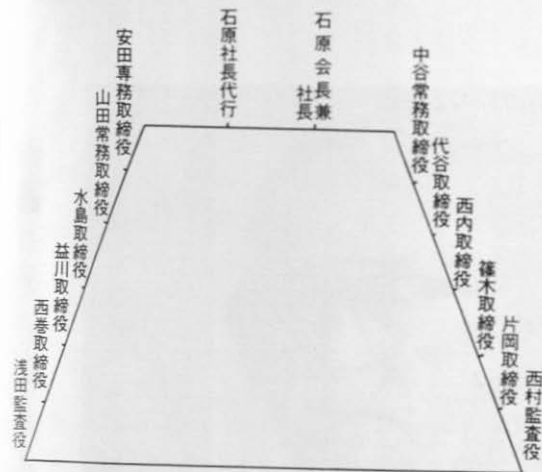
八十甲の思ひ出

監查役	監查役	取締役	取締役	取締役	取締役	取締役	取締役	取締役	取締役	常務取締役	常務取締役	専務取締役	副社長	取締役	兼取締役	取締役
西村	浅田	片岡	西卷	篠木	益川	西内	水島	若杉	代谷	山田	中谷	安田	石原	石原	石原	石原
大典	一繁	正三	義信	八郎	三良	昭彦	清	正雄	二郎	務名	孫一	正	健三	廣一郎	廣一郎	廣一郎

4 月度定例取締役会



昭和45年4月3日影





四日市工場

本社ビル

## 発刊ご挨拶

当 石原産業株式会社は、本年九月十日に創業五十周年の記念すべき日を迎えますこと、偏えに平素より変らぬ皆様のご高援のお蔭にて、厚くお礼申しあげます。

さて、本年年頭にあたり、会社五十年史編纂の企画にかかりましたが、社史の編纂は、ぼう大なものとなり、ために、ごく限られた範囲にだけ、ご覧いただくことになり勝ちでもありますので、前会長兼社長石原廣一郎が、気軽に読んでいただけるものとして、社史にかえ、創業以来、会社とともに歩んで来た、己が人生記録を「八十年の思い出」と題して上梓することにいたしました。印刷に取りかかっておりましたところ、刷成の日を待たずに今春、急逝し、今は遺稿となつてしまつた次第でございます。

なんと申しまでも、当社の歴史は創業者石原前会長兼社長の歩みを描いて語ることでできないものでありますので、甚だ礼を弁えず、ものを識らざることでありますが、亡き



紀州鉱業所



中央研究所

石原前会長兼社長の遺志を継ぎ、小録ではございますが遺稿をそのまま本書として刊行いたしました次第、なにとぞご高察賜わりまして、末尾に添えました会社年譜と併せて、当社の歩んで来ましたあとを、ご高覧賜わりますれば幸甚です。

右、八十年の思い出を、発刊にあたりまして、一言ご挨拶申しあげます。

昭和四十五年九月十日

社長 石原健三

## 序にかえて

石原産業株式会社は、昭和四十五年九月十日に創業五十周年の記念すべき日を迎えます。この半世紀にわたる会社の歩みは、すなわち会社創設以来私の歩んで来た人生であると、口幅ったことながら私はそう思い、そう信じてきました。ここに会社五十年史編纂に代えて、私の人生記録を綴り、ご一読に供する次第であります。

私はこれまでに、私の所信の一端をあるいはパンフレットに、あるいは単行本にまとめて世に問うてきました。さる昭和三十七年秋にも「予感」と題した小著を出しましたが、これらのほとんどは、人呼んで「憂国警世の書」とか、「革新啓蒙の文」とか言ってくれたように、堅苦しい嫌いのある論述で、私自身の過ぎ越し方をまとめたものは何ひとつありませんでした。私の一生が波瀾に富んだものであっただけに、暇になったら一度手ごろなものにまとめてみたいと考えていましたが、年来多忙な日々を送り、なかなかこれを手

がける機会がなかったのです。ところがたまたま昭和三十八年春、日本経済新聞社から同紙の学芸欄に連載の「私の履歴書」に、寄稿してくれないかとの依頼を受けたので、その機に念願の記録をまとめようと思ひ立ち、一気にペンを走らせたのですが、会社創業から栄光への遠かった道、爾来五十年にわたり、国家、社会の消長とともに歩んできたあとが、走馬灯のように思ひ出され、ペンの尽くるのを知らぬ始末でした。

私の履歴書は当時二十五回にわたり連載されましたが、なにぶん限られた紙面であつて、私としては、言い足りなかつた点が多く、またぜひ書き留めておきたかつたところも余儀なくカットされてしまい、心残りにたえない次第でした。

また一昨年十一月には亡き母の五十周年忌を迎え、「母の五十年の思ひ出」の小著を亡母を偲ぶよすがとし、また供養として出しました。

会社の五十年の過ぎ越しあとに思ひを馳せつつ、ここに前記両著の原稿をもう一度整理し、少なくとも自分なりに満足のできるものに、私の人生記録をまとめあげておきたいと思ひ、さらにペンを加えたのが、この一篇であります。

私の人生が今後いかに変わりますかは知る由もありませんが、八十路を越えた今日まで、会社とともに歩んできた五十年の長い記録を総まとめするにあたり、会社の今日の発展は、

また私の今日在るのは、幾多の先人の方々、株主各位、取引関係先の常に変らぬ温かいご支援と、石原精神に徹し不断の努力を惜まず協力してくれた従業員諸君の力によるものであり、また今は亡き母の無限の加護と、亡き妻の献身の内助にもよるものと、夢寐にも忘れたことはなく、私は実に恵まれた男であつたと、これらの人々を欽慕し、感謝するものであります。

私が育ち、私が生きてきた時代と、今とは時代がすっかり変わっており、また私が歩んできた特異の体験と思想が、果たして現代の人にどれだけ共感を得られ、また参考になるかは別として、人間としての在り方は、現代においても決して変わるものでないと固く信じ、会社の五十年の歴史を顧りみながら、この小録を皆さまにお届けするものです。ご清覧を得ば幸いです。

昭和四十五年二月

石原 廣一郎

## 目次

発刊と挨拶

社長 石原健三

- 序にかえて……………石原廣一郎
- 一 幼少年のころ……………1
- 二 南方雄飛の決意……………6
- 三 渡南の準備……………11
- 四 ゴム栽培の目的でマレーに渡る……………13
- 五 ゴム栽培予定地パンチョールに落ち着く……………17
- 六 バトバハ水道事業失敗と石原洋行……………21
- 七 スリメダン鉄山の発見……………26

八	慈母の急死と奇蹟……………	31
九	八幡製鉄所白仁長官と私……………	35
一〇	中川小十郎先生の尽力……………	38
一一	予期せざる障害……………	41
一二	絶望から立ち上り……………	44
一三	南洋鉱業会社の誕生……………	48
一四	バトバハ開港場指定と国王の好意……………	51
一五	希望に輝く必死の建設と夕張丸の入港……………	56
一六	スリメダン鉄山の建設なる……………	60
一七	日蘭合弁スマトラ開発計画……………	65
一八	関東大震災によりスマトラ開発は挫折……………	70
一九	自家輸送船計画の達成……………	74
二〇	政府低利資金借入れと輸送船の購入……………	78
二一	知らぬ間に基礎固まる……………	82
二二	遂に日本製鉄原料を南方で解決……………	87
二三	海南島田独鉄山の開発……………	93
二四	内地事業に着手……………	99
二五	南洋倉庫の経営……………	105
二六	南方貿易増進とジャワ航路の開設……………	108
二七	ジャワ航路開設の成果と反響……………	112
二八	日蘭通商会議の開催……………	117
二九	神戸海運会商は予備折衝中に決裂……………	120
三〇	徳川義親候との因縁……………	125
三一	神武会と大川周明博士……………	129
三二	明倫会と田中国重大将……………	133
三三	検事総長林頼三郎氏を知る……………	137

三四	二・二六事件と私(その一)	141
三五	二・二六事件と私(その二)	145
三六	四日市工場地帯を開発(獄窓で銅製錬の構想を練る)	154
三七	東条内閣成立の直前	158
三八	フィリピン戦線を見て	162
三九	終戦の直前	165
四〇	終戦から逮捕令	169
四一	巢鴨拘留所に収容	173
四二	巢鴨生活	177
四三	巢鴨の取調から放免まで	182
四四	巢鴨生活で人生の仕上げ	187
四五	放免直後の慰問の旅	191
四六	終戦後除草剤の開拓	195

四七	終戦後酸化チタンによる復興	199
四八	日本/インドネシア合弁銀行の設立	209
四九	マレーシアに錫製錬所建設	215
五〇	皇太子殿下へのご進講	219
五一	わが人生と事業に思う	225
	石原産業株式会社売上高、利益金推移表	229
	石原産業株式会社年譜	230